

# 伝説の巨鳥たち

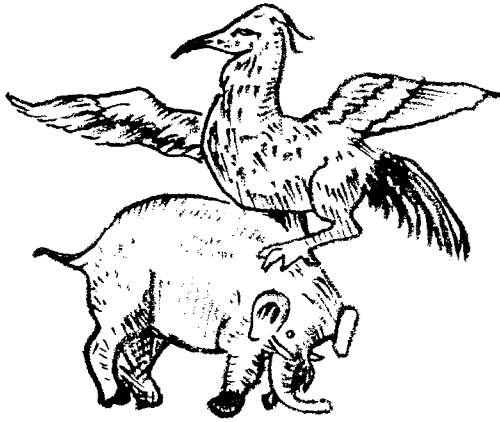
県立横須賀工業高校 松木謙一

## 【はじめに】

イスラーム世界の広がりを生徒にアピールするのは難しい。そんな時、目に入ったのがルフ鳥。教材化の試みをし、世界史研究推進委員会で発表したのが去年の一〇月、でも、宮崎正勝先生の『ジバング伝説』が出版されたのもこの時期。そこにほとんど書いてあるのだから参った。気を取り直して作業を続けたのが今回の発表。

## 【巨鳥伝説の広がり】

絵 1



上の図はアンドロヴァンディの『鳥類学』に掲載されたルフ鳥で、それを私が写したものだ。「象を持ち上げる鳥なんているの？」と生徒に思わせておいて、以下の資料からこの絵が描かれたわけを示して伝説の広がりを示したい。

絵 2



(1) 「東方見聞録」にみる巨鳥伝説

マルコ・ポーロの実在についても異説（フランシス・ウッド説、杉山説など）をあげて「右の絵の人物は本当にいたのか？」と生徒に提示してみたい。いわゆる当然の事実と思われることに對して疑問をもつことは重要だからだ。基礎力の不足している生徒でもかなり興味を示した。いけない、本題に戻ってルフ鳥の記載を見よう。

△資料ⅠV 「モグダシオとは、スコトラ島の南方千マイルにある

鳥である。…(略)…なおここより以南に位置する他の多数の鳥々には、…(略)…そこにはかの怪鳥《グリフォーン》が年間のある決まった時季に飛来してくるとのことである。ところでこの怪鳥《グリフォーン》であるが、これはヨーロッパで一般に信じられ描かれてもいるような鳥ではない。我々の間ではこの怪鳥を半体が鳥で半体が獅子という風に語られているが、事実これを目視した人の言によると、決してそんなかつこうをしていないそうであつて、姿は普通の鷲に似ているがただとてつもなく巨大な鳥だということである。この怪鳥については、それを実際に目視した人の報告をお伝えすると共に、私自身の所見をもあわせてお聞かせしようと思う。聞く所によれば、この怪鳥はすばらしく巨大でかつ強力であり、一頭の象をその爪でさらつて楽々と空中高く吊り上げることができ<sup>る</sup>。この怪鳥は大空に高く吊し上げた象を地上に叩き落として粉碎し、しかる後に、ただちに舞い下つてこれに襲いかかり、嘴で肉を裂き餌食としてこれを食ひ平らげるといふ。また目撃者の談によると、両翼の全幅は三〇ペースに達し、羽毛の長さ一二バーム、太さはそれにならうと言われている。…(略)…使臣(私注 カーンがモグダシオ鳥に派遣した使臣)が実はその羽毛をカーンの許にもたらし帰つてきたのである。これを本書の語り手たるマルコ・ポーロその人が自分で量つてみたのであるが、なんと驚くなかれその長さは九〇スパン、羽莖の円周は二バームにも及んでいた。…(略)…島の住民はこの巨大な鳥をただ《ルク》とのみ称して他の名称を付していないし、《グリフォーン》といつても通じないけれども、目撃者が語る《グリフォーン》の翼長の巨大さに照らして、土人のいうこの《ルク鳥》こそ《グリフォーン》にはかならないことは誰に

も確信できる所なのである。」

ここに記載されたモグダシオ鳥が、ソマリランドのモガディシオ地方とマダガスカル島との混在であることに注意したい。アフリカの地図で海流を含めて生徒に確認させる。また、一二バームの羽毛で、どれ

くらいの大サイズの巨鳥をイメージできるか生徒に示してみるのはどうだろうか。

(一二バーム×二〇cm || 二・四mの羽毛を実際に模造紙に書いてみた。何か

▲生徒に巨鳥の大きさを計算させる

- 1 ペース (pace) = 152cm強
- 1 バーム (palm) = 8 インチ = 20cm強
- 1 スパン (span) …手のひらを十分に広げた時の親指と小指の間 …中国の尺と同じ発想 = 9 インチ = 23cm強

はたぶんバショウの葉であるに違いなく、逆にそのあたりを生徒に示せることで納得した。) (2) 『アラビアン・ナイト』に登場する巨鳥伝説

生徒はこの話を余り知らない。しかし、話をするとかなり興味を示し、ドラえもんの『ドラビアンナイト』の種本だったことを知つて吃驚する。

△資料2V「その鳥の中ほどに、何やら巨大なつくりの真白な物体が見えてきました。それで、樹の上から下りると、そのものの方へと志し、ひたすらにその方角へと突き進みました。…(略)…なんとまあそれは、巨大な白い円屋根の建物で、それが高だかどそそり立ち、広びろとひろがっているのだつたではありませんか。その

建物に近寄り、周囲をまわって見ましたが、どこにも入り口の扉も見つけることが出来なかったが、さりとてその 壁面はあまりにもすべすべと滑らかで、ひらべつたいため、(略)：自分の立っている場所を目印をつけておいてから、円屋根の建物のまわりを一周し、その周囲の距離を測ってみたところ、なんと僕に五十歩の長さがあったではありませんか。(略)：そのうちに、太陽がかくれはじめ、大空もうす暗くなってきたと思うと、にわかには何かに被われました。(略)：それは生まれ得て巨大、体躯雄大、双翼広大な鳥が虚空を飛翔して居るのでした。(略)：むかし、旅行や航海を事としている人びとが話してくれたもので、数多い鳥じまの中には、体躯巨大な鳥があつて、その名をルフといい、雛鳥どもに象を餌として与えているということだったのでした。(略)

：そのとき鳥めは、地べたから、爪のあいだに何やらんつかみあげ、大空の雲の方へ翔り上がって行きます。わたくしがじっと見上げてみると、なんとそれはおそろしく長く、バカでかい図体の蛇だったではありませんか。(略)：またこれらの蛇どもは、夜間に姿を現し、昼間は隠れているのですが、それはルフ鳥やワシがさらい取って、バラバラに引き裂いてしまうのを恐れるからです。

この話は、「海のシンドバード第二航海」の第五四三夜後段及び五四四夜。この話と類似した話が再度「海のシンドバードの第五航海」の第五五六夜に登場する。

(3) 「三大陸周遊記」にもある巨鳥伝説

一四世紀を生きたイブン・バットウータもこのように記している。

△資料3V「この光景には驚いたが、「見れば船乗りたちは、さめざめ泣きながら、互いにこの世の別れを告げ合っている。「一体、

絵 3



どうしたことか」とたずねると、「山だとばかり思っていたのが、実はルッフ(ルクまたはロック、巨鳥)だった。おれたちを見たら最後、皆殺しにするだろう」もう船から十マイル足らずしか離れていなかった。そのとき、いと高きにおわすアツラーは、絶好の風を送り、反対の方向に船を転じさせたもうたので、われわれはついに巨鳥ルッフを見ず、果していかよの姿形のものであるかを知るに至らなかった。(前嶋信次訳『三大陸周遊記』角川文庫より)

(4) 鷲を使うダイヤモンド探しの話

a 「アラビアン・ナイト」には△資料4V「さる商人たち、航海者たち、旅行者たちから聞き及んでいた一つの土産話でした。それは、つまり金剛石の山の中にはまことに身の毛もよだつような恐ろしいことどもが多く、誰一人その中には行って行くことは出来ない。けれども、この宝石を取引している商人たちは、それを入手するために策略をめぐらしている。それは羊を連れて行って、喉を切つて殺し、皮を剥いで、その肉をいくつかに切り、高山の頂から谷底へ向かつて投げ落とすのである。肉はしめつけていて軟らかいから、かの宝石のいくつかがこれに密着してしまう。(略)：やがてワシやハゲタカなどの鳥どもが、くだんの肉めがけて下りて来て、爪の

中につかみとって、そばの山のてっぺんまで翔り上って行く。そのとき商人たちが、その場にやつて来て、大声で叫びたてる。すると、鳥どもは、それに驚いて、肉のそばから飛び立ってしまう。商人たちは、肉のところに進み寄り、くつついている石をひっぱがして取り…(略)…とある。この話に生徒は興味を示し、金剛石についての「鉱石や寶石などに穴を穿ち、また陶磁器や縞瑪瑙などにも穴をあけるにつかう金剛石で出来ておりました。これはきわめて固くしぶとい石で鉄や石塊をもつてしてもなんの痕もつけることが出来ないし、鉛石というものをもつてしない限り、誰もこれを切り取ったり、砕いたりすることは出来ぬという代物なのです。」という説明から「金剛石ってどんな鉱石?」という、かなりの生徒が答える。

b「東方見聞録」にみるムトフィリ王国でのダイヤモンド取りの話  
△資料5V「ムトフィリ王国は、マーパールの北方五〇〇マイルにある。とても賢明な女王が在位している。女王は夫君を失って既に四〇年であった。…(略)…この王国にはダイヤモンドを産する山が少なくない。…(略)…冬季になつて雨が降ると、山地から流れ下る水は深い岩窟中を滝のような急流をなして溢れてくる。雨が止むとこの水もひくので、人々は激流の後の河床を探索して、多数のダイヤモンドを手に入れるのである。夏季には雨は一滴も降らないから、この時期なら山中に入って採取できるのであるが、何しろ暑気がきびしいから並みのことでは耐えられない。それに山中には、胴まわりが太くかつ長い図体をした大蛇がうようよしているの、とても恐ろしくて近寄れない。…(略)…この地の大蛇は有毒でかつ獐猛であるから、毒蛇が好んですまっている岩窟内だけに踏み

込まない。…(略)…次のような方法がとられている。すなわち餌に適切な生肉の塊をたくさん作つて、これを谷底に投げ込む。肉塊が投げ込まれた谷底には、ダイヤモンドがいたる所に露出しているから、これが肉塊につき刺さる。一方この山間には、蛇を常食とする白鷺が数多く棲息しているから、この白鷺が谷底に投下された肉片を見つけると、舞い降りてこれをさらつて行く。人々は終始この鷺から目を離さず、その行く先を注意深くうかがつていて、鷺がよいよ降り立つて肉を裂き始めると見るや、直ぐその方向に急行する。鷺は人間が不意に近寄つてくるのを知ると驚き、肉塊を置き去りにしたまま飛び立つ。人々は肉塊の捨てられている地点にいたつてそれを拾うのだが、この肉塊には多数のダイヤモンドがつき刺さつていたのである。なおまた次のような手段でダイヤモンドを手に入れることもできる。すなわち上記の肉片を鷺が食い平らげるとき、ダイヤモンドもいっしょにのみこまれるから、鷺が夜分その巢に帰るとこれが糞に混じつて排泄される。この糞を集めてくると、なかなか多数のダイヤモンドが得られるのである。…(略)…ダイヤモンドは、世界広しといえども、ひとりこムトフィリ王国だけにしか産出しない。この地方では良質のものが実に豊富である。もつともこれら良質のダイヤモンドはヨーロッパ諸国へは将来されず、カーンおよびこの地方の諸王貴族のもとにすべてが集められる。」  
後者はインドの話であるが、これらの資料から生徒に巨鳥伝説の海域世界での広まりと当時の活発な交流をイメージさせたい。

#### 【ヨーロッパ・インド・中国での巨鳥】

ここでは深入りせず、紹介するにとどめておきたい。

(1) ギリシアのグリフィン(グリフォン)

(2) インドの「ガルダ」…金翅鳥。迦楼羅：仏教の經典中にみえる一種の大鳥。鳥の頭と嘴、赤い翼と爪をもち、両翼をのばすと三三六万里ある。金色の体は人間で、口から火を吐き竜(蛇)を取って食うという。タイやインドネシアの国章に使われている

(3) 中国の「鵬」 莊子に記載あり。鳳・鳳も類語

ハ資料6V 逍遙遊第一 北冥有魚 其名為鯢 鯢之大 不知其幾千里也、化而為鳥、其名為鵬、鵬之背、不知其幾千里也、怒

而飛、其翼若垂天之雲、是鳥也、海運則將徒於南冥、南冥者、天池也、齋諧者、志怪者也、諧之言曰、鵬之徒於南冥也、水擊三千里、搏扶搖而上者九萬里、去以六月息者也

【本當にいた巨鳥たち】

(ア) マダガスカル鳥のエピオルニス (別名エレファント・バード)

絵 4



一六六一年にフランスのフラクール総督が『マダガスカル物語』でこの鳥の巨鳥の話ヨーロッパに紹介。一八五一年に卵2個と巨鳥

の骨がパリに送られ、パリ自然博物館のジョフロワ・サンティレールによりエピオルニス・マキシムス(最大の背高鳥)と命名。その後、マダガスカル島西海岸の湿地で大量の骨の発見され、高さ三m、重さ五〇〇kgある駝鳥の仲間植物や小動物を主食とした大人しい鳥と判明。一九世紀半ばまで生存していた可能性もあるが、成鳥が発見されなかったことからそれ以前に絶滅したと考えられている。

(イ) ニュージールランドのモア…森に2匹の大トカゲに守られた巨鳥モア(オンドリの姿をして人間の頭をもつ)がいるというマオリ族の伝説があった。この鳥から一八三八年秋 大英博物館オーウェン教授のもとに骨が届き、彼は「ディノルニス(恐鳥)」についての論文を発表、この鳥が五属多種の鳥で、小種は七面鳥の大きさ、最大種は高さ四・二mあるとした。一九三七年にモア沼が発見され、古い遺跡ほど大型のモアの骨が出土し、新しい遺跡からは小型のモアと貝や魚の骨の増加していた点から、モアは、狩りで次第に減少し、一七世紀に絶滅したと考えられている。

【まとめ】

生徒のイスラーム・ネットワークへの理解を深める手段として巨鳥伝説を扱うとともに、伝説にはそれなりの根拠があること、人間こそが他の種を絶滅させ環境を破壊してきた点にも触れたい。

〈主な参考文献〉 ○伊藤進『怪物のルネサンス』河出書房新社、

○前嶋信次 訳『アラビアン・ナイト』平凡社 東洋文庫 ○愛宕松男訳『東方見聞録』1・2 平凡社ライブラリー ○宮崎正勝『ジパング伝説』中公新書 ○吉村卓三『巨鳥の歩んだ道』メタモル出版 ○「たくさんのふしぎ 巨鳥伝説」福音館書店